

【NTR支配】夫の上司に墮とされる強制絶頂2

く居酒屋でも、タクシーでも、夫のすぐ隣で開発され尽くす背徳の夜く

サンプル（一部抜粋）

「…ファンデーションで隠れるかな。」

黒崎さんに縛られていた手首には、冷やしても消えない生々しい痕が残る。

また今日も黒崎さんに会うのか…。

「はあ…」

（中略）

指定されたお店の前までやってくると、祐也が私を見つけて駆け寄って来た。

「奈々！」

「あ、祐也…」

「昨日は色々と心配かけてごめんね。黒崎さんが助けてくれてさ…。失礼のないようにだけお願いね…！」

小さな声でそう耳打ちされる。

黒崎さんが動いたのは私が対価を払ったからなのに…。ただそれを公にはできない。

「…分かった。」

小さく頷いて、沢山の不満を飲み込んだ。

祐也に引つ張られて黒崎さんの目の前に連れて行かれる。黒崎さんの冷たい目が私を捉え、フツと軽く笑っているのが見えた。飲み込まれないように目をそらすことしか出来なかった。

「奈々、こちら黒崎さん！俺の恩人なんだ！」

夫が私に挨拶のタイミングを与えるように言葉を紡ぐ。

「初めまして、奈々さん。」

黒崎さんがニコつとわざとらしい笑顔を顔に貼り付け、挨拶をしてくる。

「……初めまして…いつも主人が…お世話になっております…」

少し言葉に詰まりながら、定型文を口にし、軽く頭を下げる。

「……綺麗な奥さんだね。」

黒崎さんが祐也にそう言うのと、祐也は照れたように笑った。

「あはは、ありがとうございます！本当に優しい妻で…」

「…うん。確かに優しいそうだ。祐也君の為ならどんな事でもしそうだね。」

意味深な言葉をぶつけてくる。何も気付いていない祐也は、照れたように笑い続けていた。

（中略）

「あれ、奈々さん。」

お酒を注ぐ私に黒崎さんが平然と話しかける。

「はい……？」

「手首、怪我でもされたんですか？」

「え？」

自分の手首を見ると、ファンデーションが一部分とれてしまっていて、痣のように赤くなった痕が浮かび上がっていた。

「ん？怪我したの？」

祐也が心配そうに私の手首を見つめる。

「や……これは……」

「ファンデーションで隠すなんて、よほどその痕が嫌だったんですね。」
くすつと笑いながら、見下すような黒崎さんの言葉が響く。

黒崎さんがネクタイで縛ったから出来た痕なのに。

「……ぶつけて……しまっただけです。事故みたいなもので。」

みっともないと思って隠したんです……」

精一杯の嫌味と反撃をこめて、黒崎さんを睨みながらそう言った。

「気をつけなきゃだめだよ。」

横から呑気な祐也の言葉が聞こえる。

「…へえ」

くすつと笑う黒崎さんの瞳には、光はなかった。

(中略)

「奈々も結構酔ってるんだね。顔、赤いし！黒崎さん、良い人でしょ」

きつと本人はもう自分が何を話しているのかも分かっていないほど、酔っているんだと思う。

「そう…だね。」

どこが…と思いながら適当な相槌を返した時、黒崎さんの指が私の指からそつと浮いた。

「…？」

何…？と思いながら黒崎さんを見ると、フツと意地悪く私を見て笑っていた。

そしてそのまま手を私の太ももへと滑らせた。

「…っ」

太ももを這う指がゆつくりと内ももを撫でながら、上へと上がってくる。

やだ、やめて…必死で片手で黒崎さんの指を掴む。それでも彼の力には敵わず…指はスカートの内側に入り…ついにクリトリスへとたどり着いてしまった。

「っ！」

コリコリと指の先で、触れるか触れないかの強さでクリトリスを弾く…

何してるの…彼が望む反応をしないように、私は唇を嚙んで下を向く。祐也には…こんな変な

表情を見られたくない。

「奈々？」

「…ん？」

「大丈夫？」

「え…？」

祐也の声にパツと顔を上げた瞬間、黒崎さんのクリトリスを弾く指に力が入り、摺り上げるようにクリトリスを指の腹でくちゅつと強くなぞった。

（中略）

「ご主人は…祐也くんは家ではどんな人なんですか。」

クリトリスをぐちゅぐちゅと弄ったまま、そんな意味の分からない質問をしてくる。

「…あ…は…優しくて…誠実で、完璧な夫です…っ、あ…指やだ、やめて…」

私が祐也を褒める言葉を口にする度、クリトリスを摺り上げる速度が上がっていく…。

「…何も知らないんですね。あなたは。」

冷たい視線でまっすぐに目を捉えられる。

「え…？」

「…可哀想に。」

吐き捨てられる同情の言葉。祐也が私に隠している、横領よりもっと恐ろしい何かがある

の……？ 脳裏に冷たい疑惑がよぎった瞬間、それをかき消すように下着を強引にずらされた。

「や…黒崎さん、だめ…」

「静かに。祐也くんにバレてもいいんですか？」

「…っ」

「黙って足を開いてください。」

短い命令…。握られた弱み。大きな声を出せない状況…。

「……」

躊躇する私に、黒崎さんはスツとネクタイを緩めた。その動作を見ただけで昨夜の事が蘇ってしまう。痕が残るほど強く縛られた事実…動けない中でいき狂わされた屈辱…そのくせ身体はそのネクタイを見ただけで、恐ろしいことに内側からトクトクと熱い愛液を溢れさせてしまう。

「…聞き分けがよくて助かります。」

黒崎さんはくすつと笑ってそう言うはずらした下着を剥ぎ取り、ぐちゅつと十分すぎるほどに湿った膣へ指を入れた。

「ああ…あ…っ、は…やだ、そこ…」

「ちゃんと覚えていますよ。ココでイかせてって懇願した事。」

(中略)

「…愛する夫の前で僕に犯されるなんて、どんな気持ちですか。」
なんて冷たい言葉が耳に届く。

「……黒崎…さん。」

「…はい？」

「祐也の前で私をめちゃくちゃにして…満足ですか…。お願いだから、もうこれ以上壊さないで…」

優しい彼の胸…背中を撫でる大きな手…私は黒崎さんが分からない。

ただもう苦しくて…果ててしまう自分も嫌で、涙だけがボロボロとこぼれた。

「…無理なお願いですね。僕はまだ一ミリも満足していません。」

そつと撫でられる髪…。

私からゆっくりと離れ、手の平で私の頬を包み、涙を拭われる。

「…どうして、私に執着するんですか…」

一体いつまで…耐えればいいんですか…。これ以上、私から何を奪えば…満足するんですか…。
苦し紛れに紡ぐ疑問。

「……」

黒崎さんは少し困ったように笑って、軽く私の唇にキスをした。

避けられたはずなのに、受け入れる自分が恐ろしい。

(中略)

「奈々さん。」

黒崎さんの唇が私の耳元にそっと近づき、小さな声で囁かれる。低く冷たいくせに……妙に甘い声。

「……は……い……」

「もうクリトリスがパンパンじゃないですか。家についたら、虐めてあげますからね。今は指だけで少し我慢しててくださいね。」

紡がれる意地悪な指摘。細い指先が円を描くように動いたり、左右に揺さぶるように動いたり……彼がクリトリスを弄る度にくちゅ……くちゅ……と小さな音が響く。

声を出せない中で、身体が震えてしまう。

「っ……、あ……」

気持ちいい、違う、気持ちよくなっちゃだめ……中が寂しい……頭がごちゃごちゃして気持ち悪い。

「我慢我慢。ね？」

クスクスと耳をくすぐる黒崎さんの声。

「っ、……はあ……はあ……はあ……」

必死で深呼吸をして、快感のため息で逃す。

窓の外は見慣れた景色を映し始める。祐也と二人でよく歩く小道。散歩をした公園、アイスを分けて食べながら歩いた歩道…。

思い出は清く美しいのに…全てが塗り替えられていく。

今の私は絶頂しないように、声を出さないように、身体を震わせて必死で耐えている…。

「ココ、気持ちいいんですね。」

耳元で悪魔が囁く。

「っ…あ…はあ…っ、」

必死で息を逃す。

身体がムズムズする、黒崎さんの指が滑る度に呼吸が浅くなってしまう。

(中略)

「力、抜いて。」

黒崎さんが優しくそう呟いて、私の身体をそっと撫でる。

優しくしないでって言ったのに、私の反応を見ながらクリトリスをコリコリと擦る黒崎さん…。中が寂しい…指を入れて…そんな願望が、彼に身体を撫でられる度に溢れてしまう。

違う。私は黒崎さんに脅されたから、身体を許してるのであって…自分から求めてしまったら、もうそれは…ただの裏切りになってしまう。

「…あ…う…ああ…ん…っ、は…」

「…そんなに腰を浮かせて、もしかして指、入れてほしいんですか。」

「…ちが…」

否定の言葉は覆いかぶさった黒崎さんのキスに封じられる。

「っ…ん…」

「…舌、出して。」

「ん…」

くちゅくちゅと舌が合わさる。私の呼吸に合わせて黒崎さんが溶けそうなほど、キスをしてくる…。

「奈々さん。気持ちよさそうな顔、していますね。」

片手でクリトリスを弄りながら、もう一方で私の髪を撫でる。

寂しそうな瞳から目を離せない…。

「黒崎さん…っ」

「はい？」

「お願い…もっと乱暴にして…脅して…おかしくなりたくないんです…」

祐也を裏切りたくない…から…お願いします…」

（黒崎の支配の全容は本編にて―）